

## ホキ美術館

正会員 山 梨 知 彦 君  
正会員 中 本 太 郎 君  
正会員 鈴 木 隆 君  
正会員 矢 野 雅 規 君

普通の住宅地のはずれの場所に、杉木立を背景にして、四角い筒が数本、伸びやかに湾曲して横たわっている。杉木立側に回れば、四角い筒の一つは壁面の下方がガラスで透けており、内部に絵画が掛けられたギャラリーであることが分かる。その筒の端はまた、悠然とまた軽やかに 30 メートルほども支えのないキャンティレバーで浮かんでいる。全体に落ち着いた建物で静かな印象でありながら、キャンティレバー側からみれば驚くほどのダイナミックな一面を見せる。住宅地側から見るとその筒が 1 メートルほど、下の箱から軽やかに浮かんで支えられている。

これは個人が収集したスーパーリアリズム絵画のみを展示するギャラリーである。絵画展示に特化していることから、長いギャラリーの組み合わせで全体が構成されている。曲率が少しずつ異なる 6 本の筒型構造体を、間に月形の中庭を挟んで、3 本ずつ重ねている。地下に 2 本、半地階に 2 本、地上に 2 本配置し、そのうち 4 本がギャラリー、1 本がエントランスとレストラン、残る 1 本と中庭の下部が機械室とサービス空間である。

最初に入るギャラリーが、先述の宙に浮かんだ筒である。長さ 100 メートルもあるギャラリーの片側の壁面は、ほぼ端から端まで下方 1 メートルの幅でガラス面となっており、支える柱なく連続して開いている。そのガラス帯からは半地階レベルの中庭の樹木群の幹と緑が連続して見え、その緑が室内に下方からの柔らかい光を入れている。ガラス面の上の壁にも、対面の壁にも、写実的な絵画が並べて展示されている。写実的絵画の丁寧な筆致が落ち着いた雰囲気醸し、また建築の方もそれにふさわしい静謐さを保持し、鑑賞に浸ることのできる空間を提供している。それでありながら、目と意識を建築に向ければ、デザインの驚きの巧みさが浮かび上がる。ゲシュタルト心理学の図と地に例えれば、この建築は地でありながら極めて見応えのある図としても浮かび上がる。それがこの建築を特別な物にしている。

この 1 階ギャラリーの筐体は、壁厚の内部に骨組みを挟んで箱としての自立的な構造強度をもたせ、連続するガラス面、驚くほど長いキャンティレバー、下階との間の隙間などを可能にしている。他の 5 本の筒型構造体は RC である。裏側から人のシルエットが見える階段講義スペース、絵画を照らすスリット状トップライト、壁面からの片持ちの階段、長いキャンティレバーを見上げる位置の展示室など、あらゆる場所が隙なく巧みにデザインされている。それでいながら、建築全体の印象はむしろ和やかで控えめな印象である。

都心から離れた住宅地にあり、またスーパーリアリズム絵画のみの所蔵作品展示という美術館でありながら、開館初年度は 15 万人を超える来館者が日本各地から訪れたという。絵画もさることながら、建築にも手柄があるように思われる。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。